

平成 20 年 度

津 久 見 市 水 道 事 業

津久見市水道ビジョン

大 分 県 津 久 見 市

津久見市水道ビジョン

—目次—

第1章	津久見市水道事業の概要	1
1.1	津久見市の概要	1
1.2	津久見市水道事業の概要	3
第2章	将来予測	10
2.1	津久見市水道事業の概要	10
第3章	現状の把握・分析と課題の抽出	14
3.1	取水・配水の実績	14
3.2	浄水水質	15
3.3	施設の状況	19
3.4	経営の状況	21
3.5	課題整理	34
第4章	今後の目指すべき方向	37
4.1	将来あるべき姿	37
4.2	目標年度	37
4.3	基本方針	38
4.4	基本施策	39
第5章	収支見通し	52
5.1	収益的収支見通し	52
5.2	資本的収支見通し	53
5.3	企業債残高の見通し	54
第6章	計画推進体制の構築	55

第 1 章 津久見市水道事業の概要

1.1 津久見市の概要

1.1.1 位置及び地形

本市は、県の中心都市大分市から南東に約 30 キロメートルの豊後水道に面した海沿いの都市であり、市域は、東西 28 キロメートル、南北 12 キロメートル、総面積は 79.53 平方キロメートルです。北に臼杵市、南に佐伯市と境を接しています。市内には JR 日豊本線が通っており、津久見駅と日代駅が存在しています。大分駅まで普通で約 1 時間 10 分、特急で約 45 分の距離にあります。道路は大分・臼杵方面へは臼杵バイパス (国道 217 号) が通っており、車で大分まで約 1 時間 15 分となっています。また、平成 13 年には東九州自動車道津久見インターが供用開始され、大分市まで 20 分、福岡市まで 2 時間 30 分とアクセスが大幅に短縮されました。

豊後水道に面した津久見湾の湾口部を囲うようにして半島部の典型的なリアス式海岸が伸び、それを更に鎮南山、姫岳、碁盤ヶ岳、彦岳といった 600～700 メートルの山地が三方から馬蹄型に囲んでいます。島しょ部は、南の四浦半島の延長に保戸島、北の長目半島の延長に地無垢島、沖無垢島の 3 島があります。

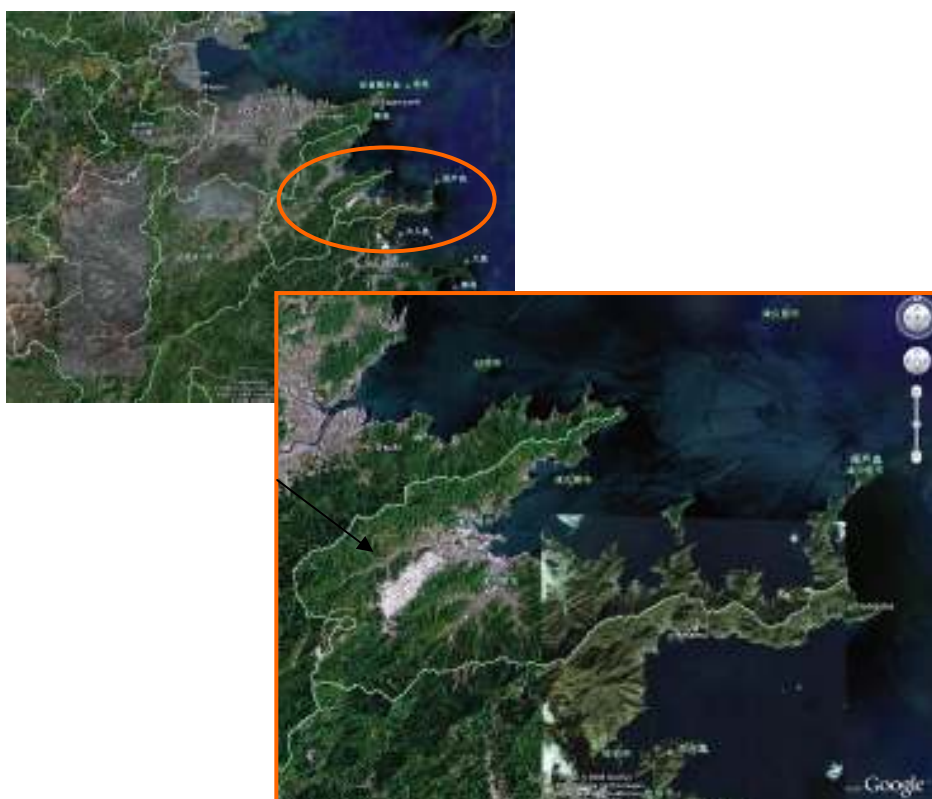


図 1.1.1 津久見市の位置及び全体図

1.1.2 沿革

津久見市の母体となった津久見町は昭和8年に旧津久見町と下浦村と青江村が合併して誕生しました。その後、この津久見町と半島部の日代村、四浦村及び離島の保戸島村が合併して、昭和26年に津久見市が誕生し、現在に至っています。

本市は、温暖な気候と山地斜面を活用して、古くから栽培が行われてきたつくみみかんは、品質、味ともに良く、高級品として珍重されてきました。また、保戸島を基地とした近海・遠洋マグロ漁や、沿岸漁業による津アジ、津サバは全国的にも有名で、新鮮な魚介を供給する食糧基地ともなり、津久見発の食文化を担っています。さらに、豊富な石灰石鉱脈と近接する津久見港を活用した、セメント町という地名もあるほどの、伝統あるライム産業（石灰石採掘とセメント産業）は、市の中心産業でもあり、近年、廃棄物処理をはじめ環境産業としての変貌を遂げています。

1.2 津久見市水道事業の概要

1.2.1 水道事業の沿革

本市の上水道は、計画給水人口 23,600 人、1 日最大給水量 4,950 m³/日の事業規模で、昭和 32 年 3 月に市内の一部へ給水開始しました。以後 50 有余年市勢の発展に従い、給水区域の拡張を行ってきました。

表 1.2.1 水道事業の沿革

名称	認可 (届出) 年度	給水 開始 年月	計画 給水人口 (人)	計画 1 日 最大給水量 (m ³ /日)	備考
創 設	S 25	S 32. 3	23, 600	4, 950	水道事業創設
第 1 次拡張	S 34	S 36. 3	23, 600	6, 600	工業用水、船舶用水の需要増大のため、給水量の増加
第 2 次拡張	S 48	S 2. 3	18, 000	12, 600	住民の水使用量の増加のため、給水量の増加
第 3 次拡張	S 50	S 54. 4	18, 000	12, 600	既設水源の水質悪化のため、新規水源の増設
第 4 次拡張	S 58	S 60. 4	22, 700	12, 600	千怒簡易水道を統合するため、給水人口の増加
第 4 次(変更)	S 62	H 4. 3	22, 700	12, 600	上青江句及び彦ノ内簡易水道を統合するため
第 5 次拡張	H 10	H 12. 4	19, 600	12, 600	給水区域拡張及び、給水人口の見直し
第 6 次拡張	H 18	H 20. 4	17, 900	9, 400	日代簡易水道を統合し、給水人口と給水量の見直し
変更届出	H 20	H 22 予定	17, 900	9, 400	荒代及び鳩浦簡易水道を統合するため

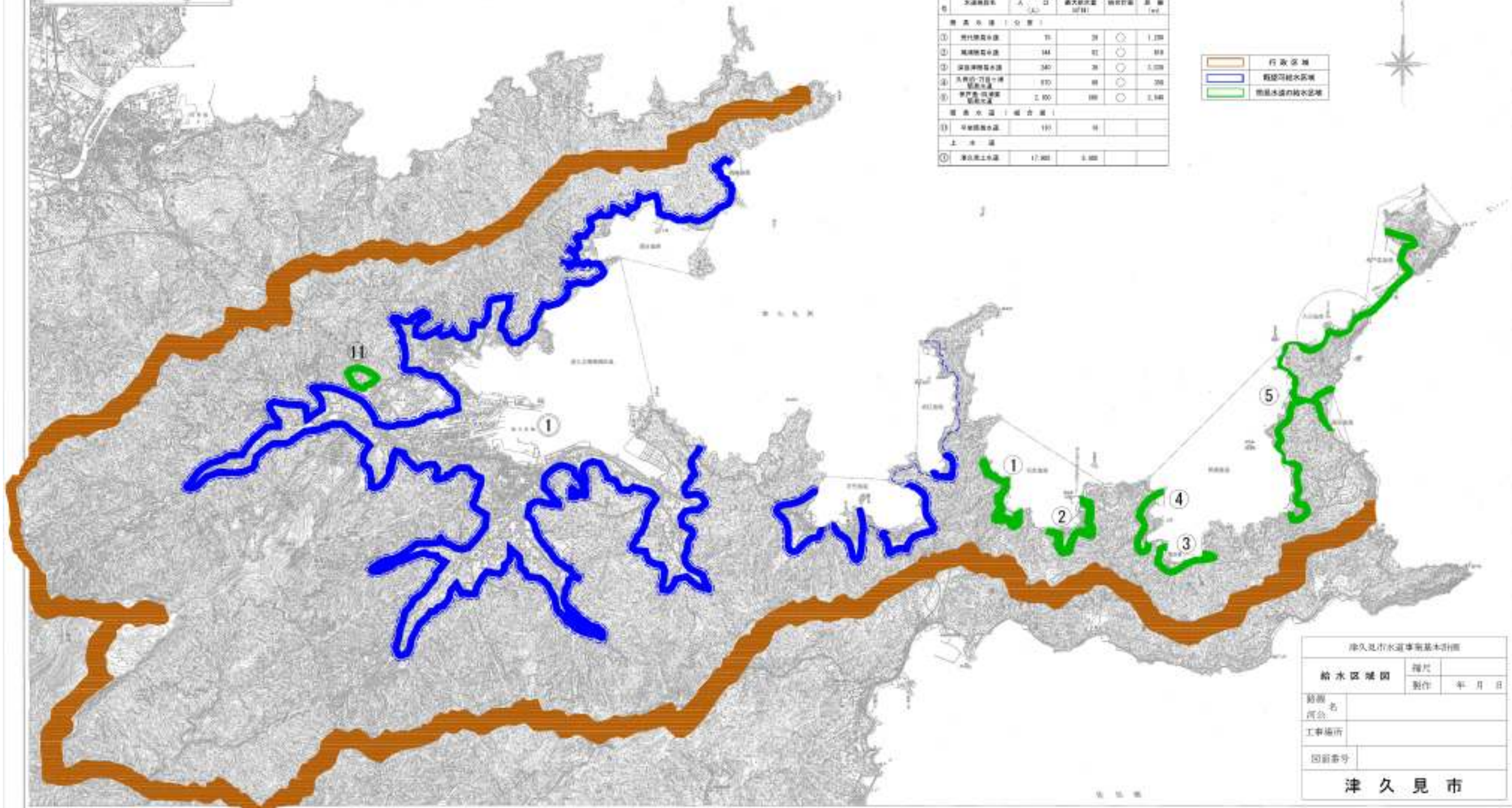
津久見市 給水区域図



水道施設の実況

種別	水道施設名	計画人口 (人)	計画(目標) 人口(人)	施設計画 (台)	施設実況 (台)
灌漑用水(公営)					
①	津久見灌漑用水	70	70	○	1,200
②	津久見灌漑用水	144	144	○	800
③	津久見灌漑用水	340	340	○	2,000
④	津久見灌漑用水	870	870	○	300
⑤	津久見灌漑用水	2,500	2,500	○	2,500
灌漑用水(組合)					
①	津久見灌漑用水	100	100		
上水道					
①	津久見上水道	17,000	17,000		

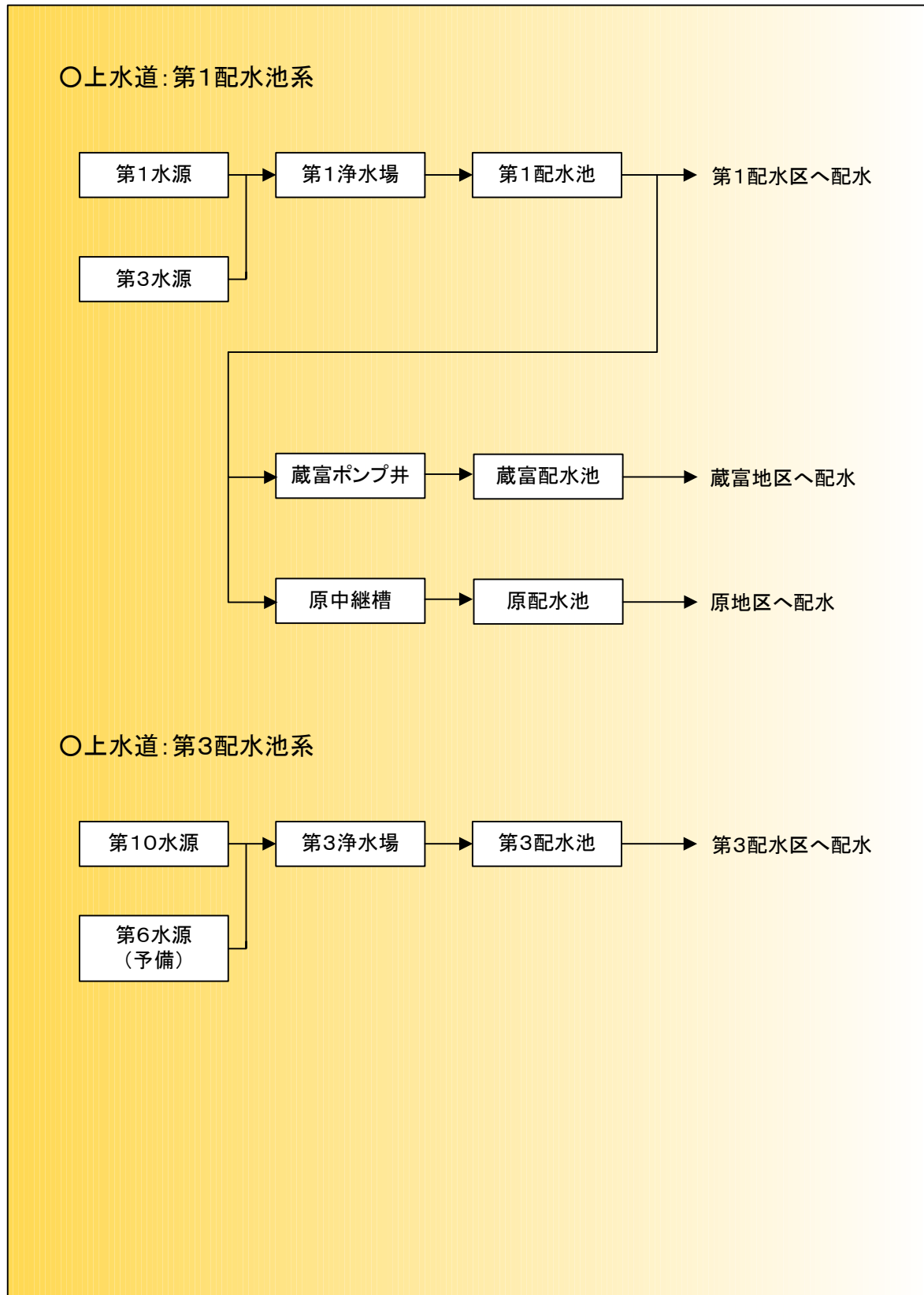
行政区域
 既設給水区域
 新規水道の給水区域



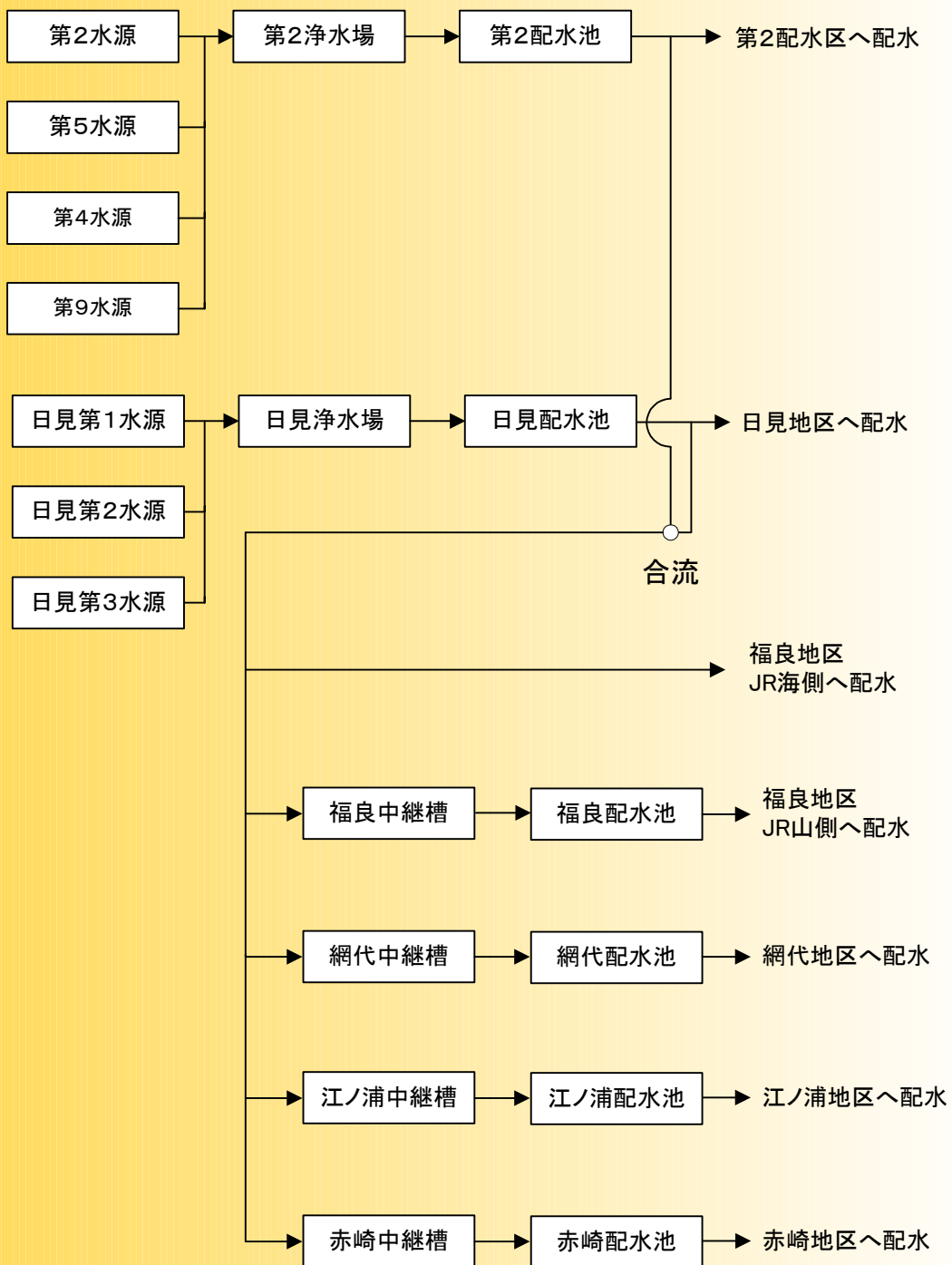
津久見市水道事業基本計画

給水区域図	編入	年月日
製作者		
工事場所		
図面番号		
津久見市		

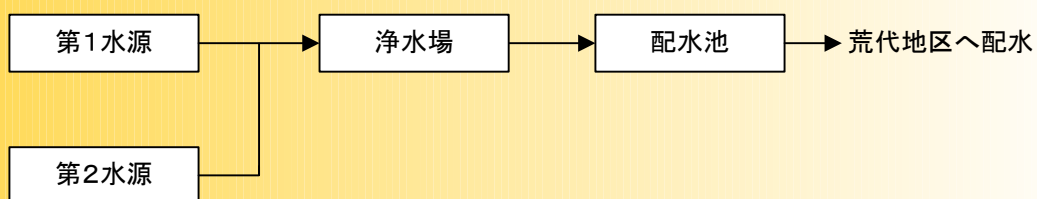
1.2.2 水道施設の概要



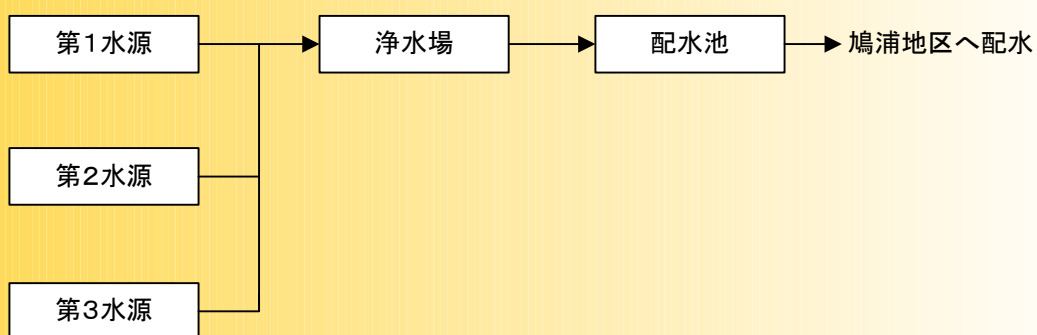
○上水道:第2配水池系



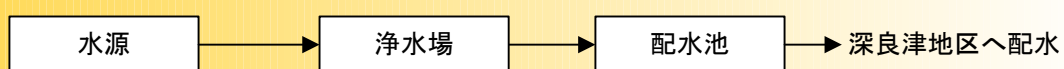
○荒代簡易水道



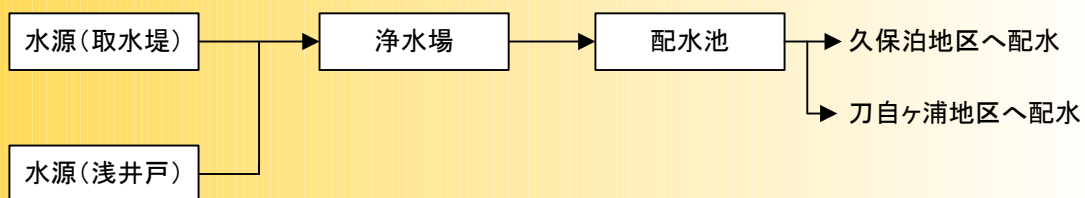
○鳩浦簡易水道



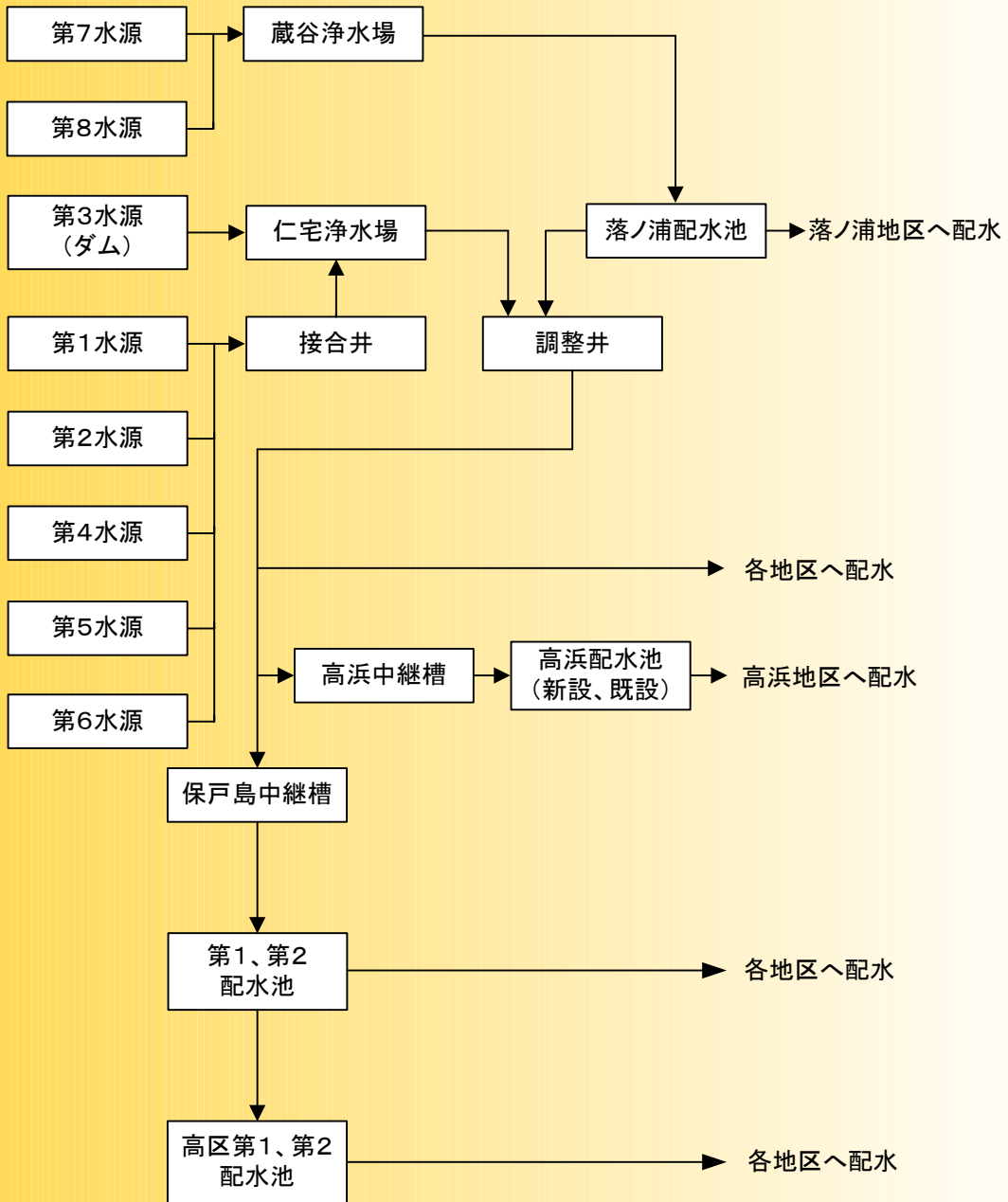
○深良津簡易水道



○久保泊・刀自ヶ浦簡易水道



○保戸島・四浦東簡易水道



1.2.3 組織体制

平成 19 年度末現在の本市水道局の組織体制は図に示すとおり、水道事業管理者、上下水道課長、業務班、工務班の組織体制となっており、計 9 名の人員が配置されています。そのうち事務職が 7 名、技術職が 2 名です。

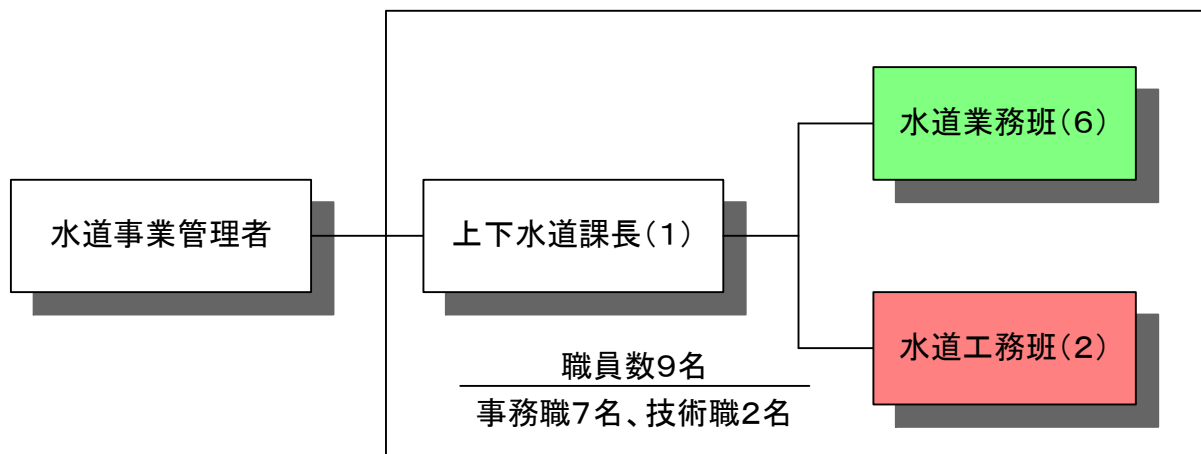


図 1.2.3 津久見市上下水道課組織体制

- 【水道業務班】**
- ・職員の勤務・人事
 - ・公印の保管
 - ・予算及び決算
 - ・契約
 - ・財政計画及び資金計画
 - ・会計事務
 - ・文書の収発・編集及び保管
 - ・統計、調査、報告業務
 - ・企業財産及び物品の取得、管理、処分
 - ・職員の諸給与、旅行命令及び旅費
 - ・企業債並びに一時借入金
 - ・現金、有価証券および担保物の保管
 - ・指定工事店の認可
 - ・給水装置の使用開始及び休止の認知
 - ・使用水量の点検及び給水取締り
 - ・料金のその他の諸収入の徴収等
 - ・料金の減免
 - ・量水器の出納保管、検査、取替、修理
 - ・課内の他の係りに属さないこと
- に関すること。

- 【水道工務班】**
- ・指定工事店の指導、監督、検査
 - ・受託工事の施工
 - ・水道施設の維持管理および修理
 - ・水道検査および残留塩素の測定
 - ・水道工事の設計及び施行監督
 - ・漏水工事
- に関すること。

第2章 将来予測

2.1 津久見市水道事業の概要

2.1.1 人口の動向

津久見市の人口動態は、昭和35年度に37,164人をピークに年々減少傾向となっています。近年、千怒地区土地区画整理などの整備が行われましたが、ほぼ一定である動向から、今後も減少傾向が続いていくと予測されます。

しかし、人口は減少していく状況にも関わらず、核家族化や高齢者の一人暮らしの増加により、世帯数は若干の減少はしているもののほぼ横ばいを保っています。

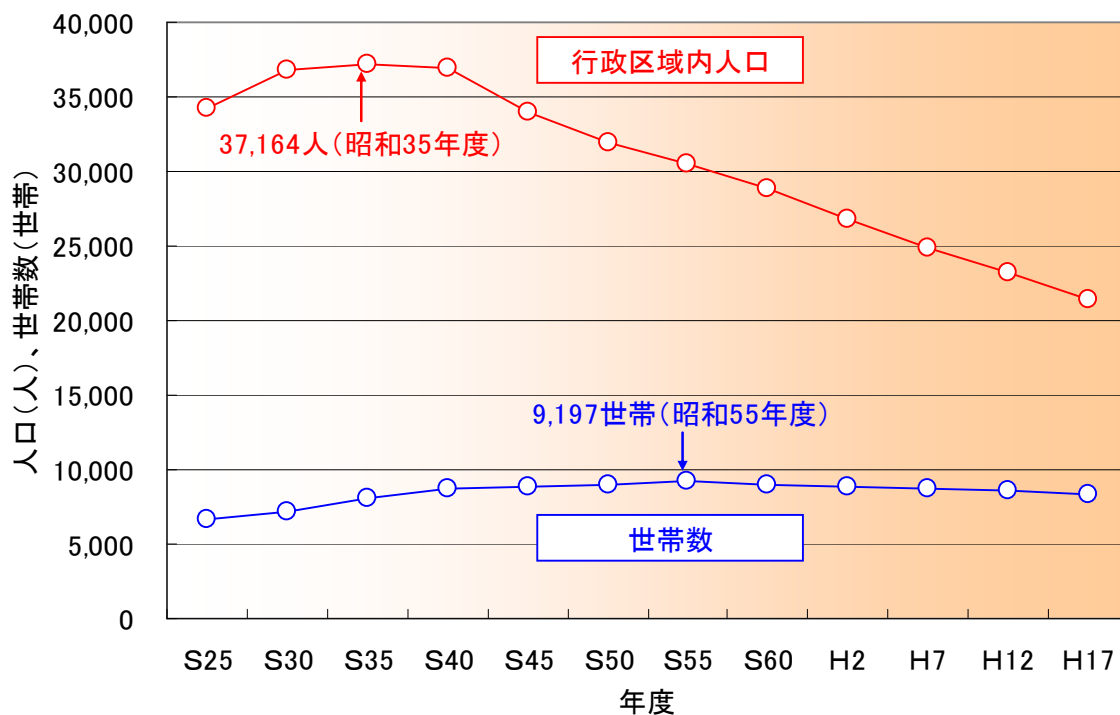


図 2.1.1 行政区域内人口および世帯数の推移

2.1.2 給水人口および給水量の推移

給水人口は緩やかに減少しており、平成 19 年度で給水人口は 16,675 人となっています。給水量も給水人口とともに減少していましたが、平成 16 年度から若干増加していき、平成 19 年度で 1 日最大給水量は 8,587 m³/日となっています。

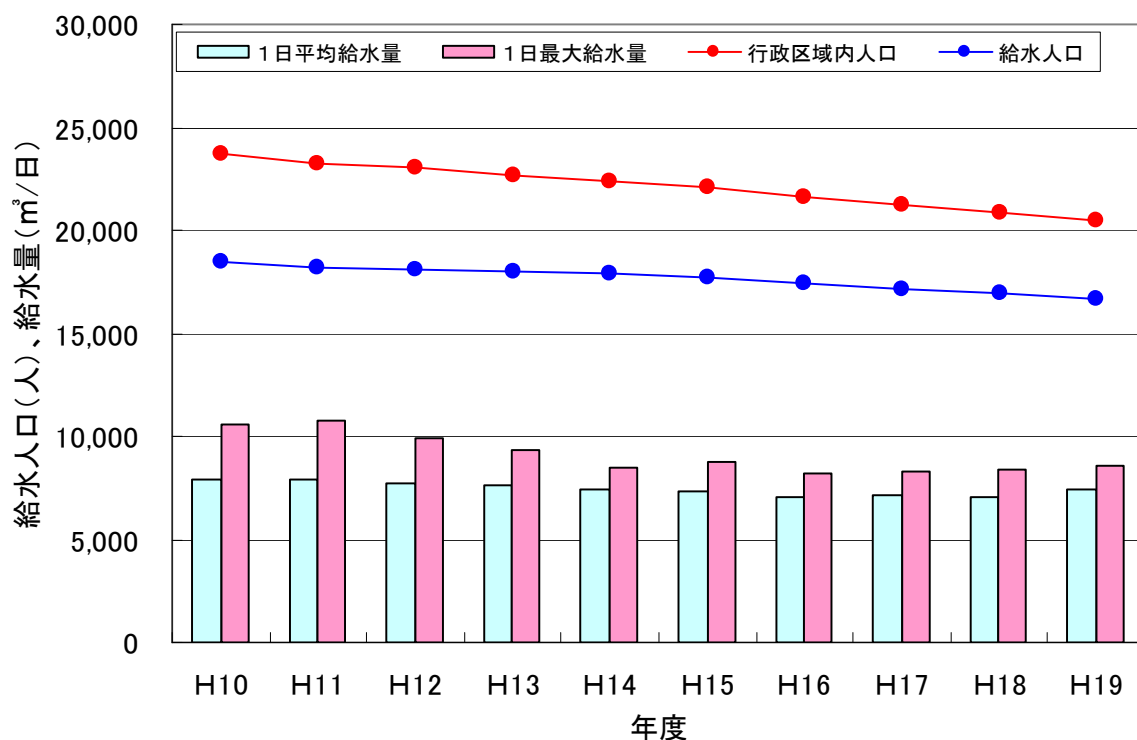


図 2.1.2 人口および給水量の推移

1 日平均給水量：給水した水量を年日数で除した年当たりの平均水量

1 日最大給水量：年 1 日給水量のうち最大のもの

2.1.3 給水人口の推計

行政区域内人口は平成 19 年度の 20,433 人から平成 34 年度では 15,991 人まで減少し続けると予測されます。給水人口は行政区域内人口と同様に減少傾向になっていますが、簡易水道統合により給水人口の増加があるため、16,000 人程度で推移すると予想されます。簡易水道統合計画が完了した後は、行政区域内人口と同様に減少傾向となり、給水人口は最終的に平成 34 年度で 15,541 人となる見込みです。

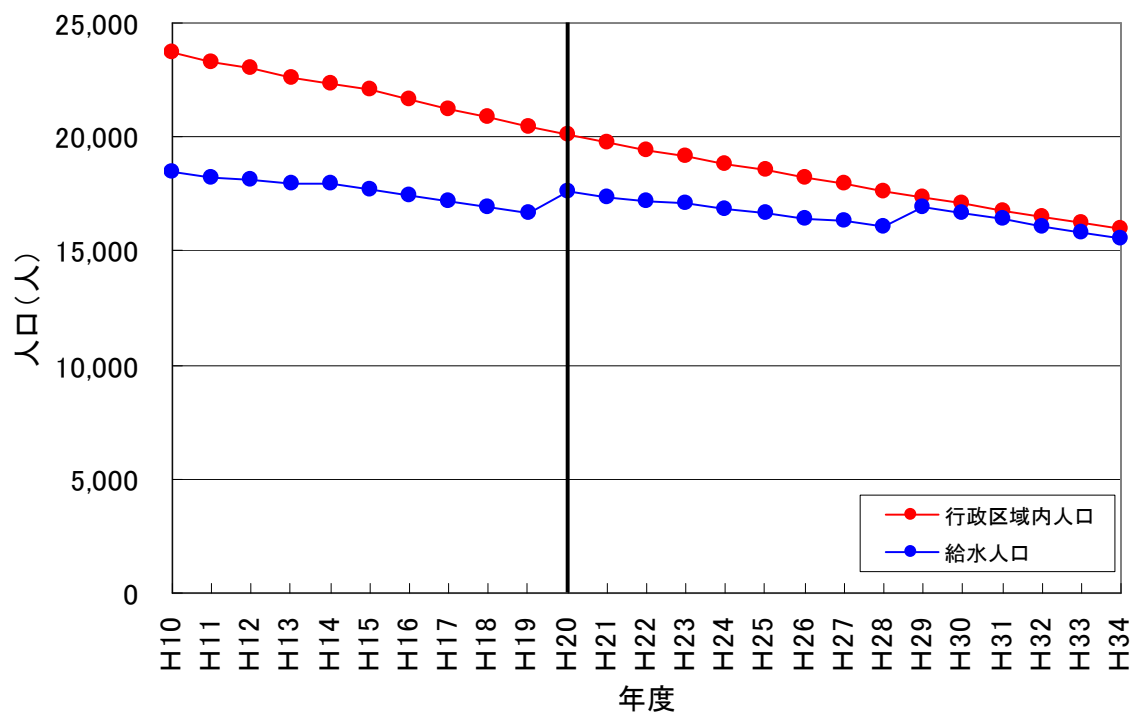


図 2.1.3 給水人口推計結果

2.1.4 給水量の推計

給水量は平成10年度より減少傾向にあったが、近年は簡易水道の統合などにより増加傾向にあります。その増加傾向も平成20年度がピークとなり、以降は人口の減少と同様に減少傾向になると予想され、平成34年度には1日最大給水量は7,559 m³/日となる見込みです。

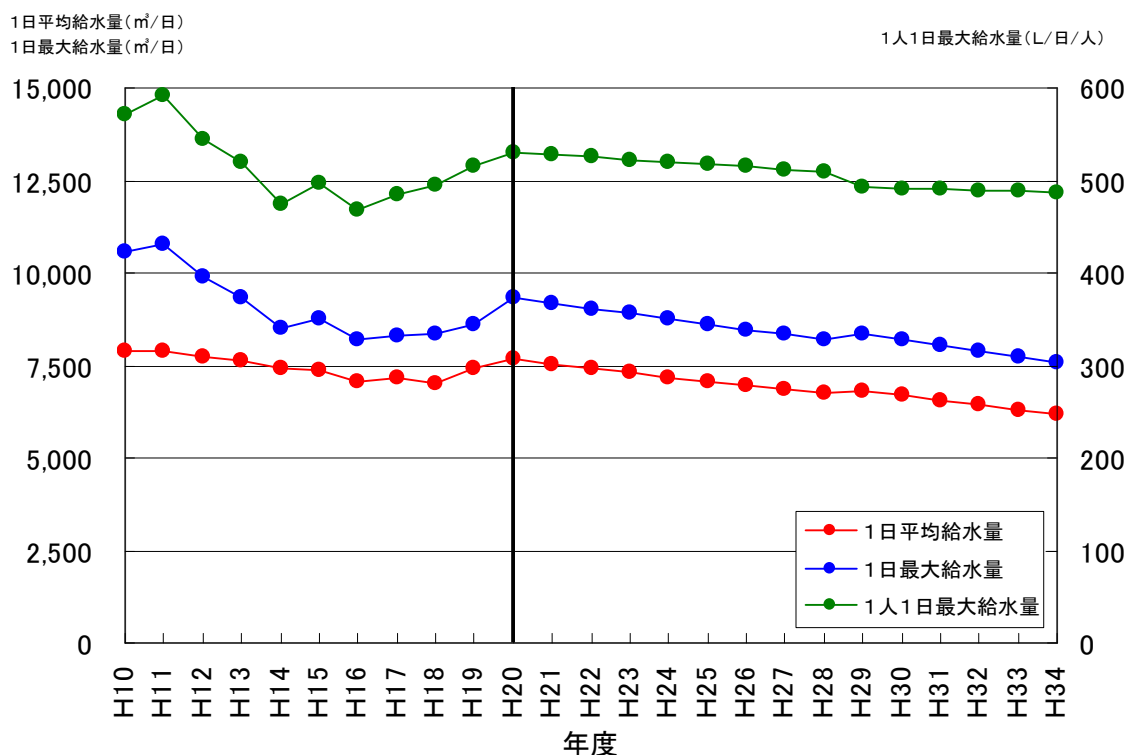


図 2.1.4 給水量推計結果